

---

# 機動戦士ガンダムSEED DESTINY GLORY

ロンリーウルフ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED DESTINY GLORY

### 【Nコード】

N9935Z

### 【作者名】

ロンリーウルフ

### 【あらすじ】

C・E・80年代。旧ユーラシア連邦から分離・独立したサンクトス連邦は、周辺諸国への侵略行為を繰り返し、世界最高面積を誇る国家へと成長した。地球圏統一という半ば無謀な夢を叶えるべく、余りに多くの犠牲を払う事となる戦火の中で、少年は何を知るのだろうか。ナチュラルの少年キィ・ムツを主人公に、今描かれる。目撃せよ、新たな運命。

PHASE 01 開戦の予兆（前書き）

「これで終わりだと思ふなよ、自由を謳った偽善者の集まりが！計画は確かに失敗した、しかし、これは世間に真実を伝えたのだ、ザフトは最強ではないと！かつて地球の8割を敵に回して、一歩も引かない強さを見せた頃と同じだけの力は、現在のザフトにはない。ここに予言を残しておこう。私はここで死ぬ。だが、私の死から10年以内にザフトは滅亡する。民衆は怒っている、そして、今起ころうとしている。プラントに革命が。世界は変わる、私はその先駆者に過ぎないのだ・・・」

## PHASE 01 開戦の予兆

(C・E・80年代、世界は変革の時期を迎えていた。コーディネーターとナチュラルの対立は世界連盟樹立によって表面上の和解は成功に至った。同時に、新型MS開発禁止条約が結ばれ、世界は平和への道を進んでいるかに見えた。しかし、戦争は終わらない。C・E・76年のサンクトペテルブルグ演説の最中、後にサンクトス連邦首相となるオートー・サブナツクはこういった。「地球圏単一国家を建設しなければ、世界平和は有り得ない」と。同国は建国からC・E・81年まで、多くの国を侵略、世界最高面積の国家にまで急激に成長する。やがて世界は、デービス連邦が地球圏単一国家を建設するに至るまで150年余り、自国の利益、宗教・人種的対立その他多くの“言い訳”の下、数多の戦争が繰り返された時代。後世の人々はこの時代を、『先導覇権時代』と呼ぶ・・・)

サンクトス連邦宇宙軍第五艦隊旗艦にして、ルート・ハルバートンが艦長を勤めるアークエンジェル級第三番艦「セラフイム」。この時第五艦隊は、宇宙軍大将アミルカレ・ミロヴィチからの命令を受けて、「ある場所」へと向かっていた。「セラフイム」にとっては始めての出航。この艦のMSデッキにて、とある少年も“始めて”をその身で体感していた。彼の名は、キイ・ムツ。ミカンのような橙の眼にクリーム色の髪。肌の白っぽい黄色人種で、大きな耳が特徴。彼の名はキイ・ムツ。オーブに住み着いた日系人の血を引いたナチュラルの少年。

「おいムツ。ムツって。オイ、ムツ！聞こえないのか？上司が話しかけてんそやからよ、返事くらいしろよ、ムツ！」

「へ？」

ムツは驚きを隠せなかった。画面モニターには男の姿が映っている。色は黒いが、黒人にしては白い。

「ガボン曹長！」

ムツが驚いたような口調で切り返す。

「フン、その様子だと大分キンチョーしてるみてえだな。」

「はい、少し・・・」

ムツの顔は青ざめていた。

「気にするなよ、最初はどちらさんだってほんな思いするんだぜ。

俺だってそうやったらな。」

「え、中尉がですか？」

ムツの表情が変わった。

「ああ。俺が始めての出撃でな、機体が思いつきり被弾してよ、シ  
又かと思つたもんよ。まあほんでなもも、生き残つたから今ここに  
おるんやけどな。ただ、あんときゃシヨンベンちびつちまつたなあ、  
ハハハ。」

そういうと、ガボンの顔に笑みが毀れていた。

「まあいつても、俺達の任務はあくまでも主力部隊の援護や。いく  
らトレンチとはいえ、あまり下手な事でもやらなきゃ、命の危険は  
ないような仕事そやからな。そやから無理はするな、分かつたか？」

「ハイ。」

ガボンが回線を切る。ガボンの言葉で、ムツは少し気が楽になった。  
「フウ。」

ゆっくり溜め息を吐く。もうすぐ出撃か、ムツはふとそんな事を考  
えていた。無重力の影響からか、少し気持ち悪い。回線が切れた数  
秒後、ムツは今回の作戦の事を少し考えてみた。

これから向かう先はグナイゼナウ・スリー。ユニウス戦役の後に建  
造されたプラント所有のコロニーで、同国が所有するコロニーの中  
では地球から最も近い位置にある。第五艦隊に任された仕事は、こ  
この攻撃であった。これがザフトとの戦争になる事を予定しての行  
動だった。その主力はエストックに搭乗する、尉官階級のパイロッツ  
ト。ムツは伍長だから、下士官階級になる。下士官というのは、主  
に士官学校を経由せずに軍人になった人間が就く地位で、上の准官

以上になる事は少ない、というかほとんど無い。ムツはオーブ出身者であるために士官学校に入学出来なかった。上機はトレンチ。ダガータイプの頭部に、V字アンテナ。世間では“ガンダム顔”という言い方をされるMSであるが、“ガンダムタイプ”ではないし、性能はエストックより低い。今回の作戦、第五艦隊は「セラフイム」を含む7隻の軍艦。MS数は50機。内、エストックが7機、ヌーベルダガーが40機、トレンチは3機。どという訳か、一番性能の低いトレンチが一番少ない。理由としては、トレンチは基本的に初心者向けに用意されたMSである事にあるといえるだろう。第五艦隊はベテランないし実力派の人材が多いが、新人が極端に少なく、今回が初陣のパイロットはムツを含めて3人しかおらず、さつきモニターに映っていたガボンにしても上機はヌーベルダガーである。ムツ個人はそれを余り快く思っていない。馬鹿にされているみたいで。

「全システムオールグリーン、ムツ機、発進どうぞ！」  
アナウンスが流れた。それに伴って「セラフイム」のハッチが開き、レールが前に延びた。レール後方にはムツの上機、トレンチの姿がある。

「キイ・ムツ、トレンチ、行きます！」  
トレンチはレールに沿って直進、レールが切れたところで機体は上昇する。

「うっ。」  
ムツの体に対して、けして大きくは無いが、多少の圧力がかかる。ムツは思わず体を少しだけ反らした。

「ムツ、こっちだ！」  
モニターにはあのガボンの顔が映っていた。メインカメラを見ると左斜め後方にガボンのヌーベルダガーが確認出来た。ヌーベルダガーのマニピレーターはこちらに対して、おいでおいでと、手招きしている。ムツはそれを見ると、トレンチをそちらに近づけた。

「いいか、もういっぺんいうぞ、俺とオマエは他の連中と一緒に後

方支援を担当するんやて。初陣とはいえ、機体の扱い方は分かるよな？」

「ハイ。」

前方では1機のエストックがMS形態で胸部のビーム砲を放射した。前方のコロニーに穴が開いた。同機はその穴から内部に侵入、それに続くようにMS部隊も侵入した。

「ムツ、俺らもいくぞ。」

「ハイ。」

ガボンとムツも侵入した。コロニー内部には、人工的に造られた都市がムツの眼に映った。人の姿も多く確認出来た。

(ここを攻撃するって事は、この人達を・・・)

ムツは身震いした。そして、動きが静止する。

同時に、「セラフイム」から1機のMSが出撃しようとしていた。

機体はエストック。変形した状態でその盾には、バイコーン(二角獣)が描かれていた。

「ロイ・レギン、出るぞ。」

『セラフイム』のハッチから、1機の航空機が出撃した。やがてそれは変形し、MSの姿となる。可変MSエストックだ。

「む。」

エストックのセンサーが敵機を捉えた。1機のドムトルーパーである。ドムはバズーカ砲で発砲。数発連射したところが、エストックには一発も命中しない。ドムはビームサーベルを引き抜き接近してくる。エストックは左のマニピレーターで腰部のコンバットナイフを取り出すと、アンダースローの動きでドム目掛けて投げつける。ナイフは機体の腹部に命中する。

(ツウルルル、バーン)

ドムは簡単に爆散、それを見届けた2機のグフイグナイトッドが少しこちらに近付いてくる。

(この程度の攻撃さえロクに避けられんとは・・・ザフトの兵士

は何時からそんな軟弱になった？少なくとも俺が知っていた頃のザフト兵は、もっと強かった筈だぞ。」

エストツクの、人間でいうオデコの部分からビームが放出される。その一撃が接近してきた2機のグフに命中、片方はメインカメラに、もう片方は右のマニユピレーターに当たり、それぞれ破損した。

「クソオ！」

右マニユピレーターを失ったほうのグフがエストツクに急接近、テナペストでの攻撃を試みるも、簡単に避けられ、逆に背部から引き抜いたビームサーベルを突き立てられ、さっきのドムと同じく、爆散した。

「ヌオー！コイツ、遣りやがったな！」

メインカメラの右上部が破損した、もう片方のグフがビームガンを発砲するが、軽く避けられ、逆にバルカンでの攻撃を受け、右足で蹴飛ばされる。

「ウ、ウアアアアアア！」

後方の隕石に命中したのとはほぼ同時に、機体は爆散した。

（大した腕もないのに、接近などしてきおって。これでは、殺してくださいといっているようなもの。もっとマシな戦い方というものが出ないのか・・・）

ロイの表情には余裕というか、不満さえ見えていた。

「ウン？」

センサーが再度、敵機を捉える。それはロイにとっては始めて見るMSであった。

（ゲイツRか？いや、形状が違う。まさか新型か？）

同じ頃コロニー内部では当初の目的通り、破壊活動が断行されていた。

（これが人間のする事か？）

ムツは機体共々静止していた。多数のヌーベルダガーはミサイルで高層ビルを攻撃、倒壊させ、エストツクは市街地を爆撃、その跡地



には、黒焦げになった幾千もの人間の死体が見えた。

「オイ、ムツ。すっかりやりやあ！」

ガボンのヌーベルダガーの肩が、ムツのトレンチの肩にぶつかる。

正確には、ぶつけたといったほうがいいか。

「ですけど・・・ガボン曹長。曹長はアレを見てなんとも思わないんですか！」

ムツの口調は、妙に力が入っている。

「それはそうだが・・・」

「こんな事するのが、軍人だっていうんですか！」

ガボンは言い返す言葉がなかった。そうして会話する2人には、自然と油断が出来ていた。そんな時だった。

(ボーン)

一発のミサイルがガボンのヌーベルダガーの左脚部に命中した。左足は簡単に吹き飛ばす。

「曹長！」

「俺は大丈夫だ。ク、一体どこから!？」

辺りを見渡すと、少し先に1機のMSが。円方の巨大な盾を有し、その盾には無数の穴があり、その穴のひとつひとつにミサイルが存在している。その盾を持つ右のマニピレーターとは逆の、右にはやや大型のビームサーベルが構えられていた。全身は真紅に塗装され、頭部は星のような四角形をしている。

「コイツ。ザクやグフ、ドムってとも違う。何なんだよ、一体。」  
そっついながら、背部の大型ミサイルを放出する。相手のMSはそれを簡単に避け、大型ビームサーベルをフェンシングのような構え方でもって、突き立てる。

「そうはいくか！」

ガボンのヌーベルダガーもビームサーベルを抜こうとしたが、もう遅かった。

「うわああ！」

突き立てられた大型ビームサーベルがヌーベルダガーの右肩から腹

部左側までを切り裂いた。機体が爆発を起こす。

「ああ、ガボン曹長！」

機体の爆発によって、ムツのトレンチは少し吹き飛ばされた。

「何が大丈夫さ・・・死んじゃったじゃないか・・・」

ムツは背筋が凍るような感覚を覚えていた。今、目の前でほんの数秒前まで口を聞いていた相手が死んだ。ムツにとっては始めての事だったし、そもそも、こんな間近で人間が死んだ、それが衝撃的だった。

「曹長・・・」

ムツが呟く。しかし、何時までもそんな事を考えてられる時間はなかった。

(バキューン)

ビームが発射される音が聞えた。ガボン機の爆発によって発生した煙で遮られて、先がよく見えない。ムツははつとした。機体には命中しなかったが、そのビームはメインカメラを掠めた。

「来る。」

そう口にしたのとほぼ同時、煙を突き破って1機のMSが接近してきた。敵は1機のドムだった。ムツはとっさに機体を後退させ、その上で左のマニューピレーターでビームサーベルを引き抜いた。それに合わせるように、相手のドムもビームサーベルを右で構える。

「うっ、おおおお！」

ムツの手は震えていた。一瞬だ、たった一瞬の判断ミスが、この先彼が生きたであろう人生を全て帳消しにする、それは頭で考えなくても体が分かっている。現に今、彼はそれを目にしたのだから。双方のビームサーベルが、平行になる。そして、そのまま一直線に伸びた。ムツは相手が力任せに攻めてきた事を確認すると、左の肘を曲げ、機体ごと少し引いた。ドムが体勢を崩す。

「ヨシ！」

今度は、左肘を伸ばし、相手機の手首を掴んだ。

「しまっ・・・」

「こんのおー！」

ビームサーベルが右から左へ、動く。その刃が、敵機の腹部を切り裂いた。

「うわあああー！」

(ドウ、バーン)

ドムが爆発を起こし、破裂した。それを目にした瞬間、ムツはふとある感情に駆られた。

(やったんだ、ボクも。MSを撃墜した、アレには人間が乗っていったんだ。じゃあ、ボクは人殺しか?)

ムツは身震いした。いくら訓練をしたからといっても、実戦と訓練は違う。実際に人を殺した、その感覚は、今のムツには気持ちが悪かった。

「ううう。」

行動は再び静止する。しかし、ここは戦場、ゆっくり休める時間等、ある筈が無かった。

トレンチのレーダーが、敵機を確認した。音声で鳴る。その音声で、ふと、ムツは我に返った。

「どこだ？」

ムツは周囲を見渡した。すると、少し先に1機のMSを見つけた。明らかに、味方機ではなかった。

「アイツは。」

ムツは思った。目の前に現れたのはガボン機を破壊した、あの真紅のMS。ムツはとつさに機体を後退させ、右のマニピレーターでビームガンを構えた。

「こんのおー！」

ビームガンで発砲する。同時に機体を少しずつ後退させる。ムツは意外と冷静だった。接近戦では勝ち目がない。それは死んだガボン曹長が、身を持って教えてくれた。ならば、距離を取って射撃戦で仕留めるしかない、ムツはそう思った。射撃戦なら、ムツは割と得意なほうだ。

ムツが放ったビーム、それは敵機の肩に命中した。しかし、傷が浅すぎた。腕が吹っ飛ぶような事はなく、爆発もなかった。相手は、まるで被弾したのに気が付かないかのように、こちらに接近してくる。

「当たれえ！」

今度は連射してみた。一発目は右膝に命中したが、やはり傷は浅い。他は、掠りさえもなかった。

「クウ。」

相手は何事も無かったように接近してくる。そしてビームサーベルを突き立てる。ビームサーベルの刃はビームガンを持つ右手の肘に突き刺さった。右手の肘から下が吹き飛んだ。

「うっああ。」

機体が爆風で勝手に左側に動いた。このままではやられる、そう思ったのだろう。ムツはバルカンで応戦した。だが、バルカンの効く相手ではなかった。

「VPS装甲か！」

敵の盾から、ミサイルが放出され、左側のマニピレーターが消えた。

「マズい。」

今度は機体を上昇させるムツだが、相手の攻撃は止まらない。右から左へ、ビームサーベルは動き、その刃によってトレンチの両足が軽く吹き飛んだ。

「うっ、うああああ！」

機体が回転し出した。そのまま、コロニーの外に飛ばされてしまった。

T O B E C O N T I N U E D

## PHASE 02 刃の矛先（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月7日。事は起こった。サンクトス連邦宇宙軍第五艦隊がグナイゼナウ・スリーに侵攻、コロニー破壊作戦を実行に移す。これに対し、ザフト軍ファンクス、シュライン両隊が出動、交戦状態に陥る・・・）

## PHASE 02 刃の矛先

「クッ。」

ロイの前にも、“アイツ”は現れた。円方の巨大な盾、大型のビームサーベル、星のような四角形の頭部。カラーこそ異なるが、同タイプのMSと見て間違いはなかった。

敵機はこちらに接近、ビームサーベルを突き立てた。

「まったくザフト兵って奴は……どうしてそうも馬鹿みたいな攻撃しか出来ないんだ！」

ロイは機体を右に動かし、攻撃を逸らす。エストック右のマニユピレーターにはビームガンが握られていた。

「そうらあ！」

ビームガンが火を吹く。横から受けたビームは敵機の腹部を貫いた。機体は爆散する。

「フン。」

ロイは相変わらず不満そうだった。

「アークエンジェル級第三番艦『セラフィム』、そのブリッジ」

「艦長、ザフト軍のMS部隊が！」

女性管制官の声が響く。その声は、数メートル先の“艦長”に聞こえていた。

「遂に出てきたか、猿もどき共が！ヨシ、予定通りだ。MS部隊に退却命令を出せ！それと、ローエン格林を準備しろ。他に数発のミサイルも用意しとけ。MS部隊の退却が確認できたら発射する。分かったな！」

「了解！」

“艦長”の命令に対し、操舵手以下数名が答えた。

同じ頃だった。コロニー内部では、戦闘が繰り広げられている。戦

っているのはいうまでもなく、コロニーを破壊しようとするサンクトス連邦軍と、それを止めに掛かったザフト軍である。

ビームが飛び交い、市街地には黒焦げになった人間の死体と建物やMSの残骸で溢れていた。1機のエストックがビルを攻撃した。ビルは脆くも壊れる。その後、そのエストックはザフト軍のドムの攻撃で撃墜されたが、地に落ちたその残骸で何十人も人間が押しつぶされた。町の彼方此方で火の手が上がる。地獄絵図、その表現がよく合う状態だった。

コロニー外部にも機体の残骸が漂っていた。その中には、残骸でないものもある。

四肢を？がれたトレンチ。そこにはムツの姿があった。

ムツは焦っていた。メインカメラは残っていたから、辺りの景色は見えていたが、ここは宇宙空間。自分が今どこにいるのか、まったく検討も付かない。ムツには辺りの景色がみんな同じに映った。

「ウン、あれは。」

メインカメラの隅に、何か他とは違うものが映り込んでいる。それはドレイク級の戦艦だった。味方が、ムツは思った。

「まだ、助かる・・・」

ムツはトレンチの機体を動かした。四肢が無い分、少しだが速く動く。

「フウ・・・」

ムツは助かった気でいた。しかし、その物体に近付いていく中で、ある事に気付く。

「これって・・・」

自分が稼動しているドレイク級戦艦だったと思っていたソレ、実は大破したドレイク級の残骸だったのだ。人が乗っている様子は無い。「そんなあ。」

ムツは落胆した。まだ本格的な戦争になっていないとはいえ、ここは戦場。敵の領国に入ってきた時点で、自国の軍とはいえ、一兵卒

にいちいち気を遣ってくれる軍隊等、どこにも存在しない。ムツは半分、死んだ気になっていた。

「ハアハアハアハア……」

（プラント領月面軍事基地サンダース）

おい、聞えるか。ガリバー大尉

「ヘイ、シーベルト大佐。侵入作戦は成功したみたいですよ。しかし、意外とチヨロいもんすねえ、“テュフオンズ”ってのも。」  
油断するなよ、相手は“悪評高き狼”だ。アイツがラテンアメリカの1戦で……

「20度戦って1度も負けなかった、てんでしょ？」  
そうだ。

「ですけどねえ。ここまで拍子抜けだと、そりゃあそんな気にもなりませんよ。」

畏かもしれんぞ。

「大丈夫ですって。」

いいか、作戦を忘れるな。あくまでも目的は敵戦力の偵察だ。必要なら戦闘を行ってもいいが、出来るだけ避ける。間違えても、深追いはするな

「りょーかい。」

それじゃあ、回線を切るぞ。

「へえい……まったく、大佐は心配性なんだからよ。それじゃあ、ガリバー小隊、偵察任務続行だ。」

了解

「しっかしい、ホントにここ軍事基地なのか？それらしき構造なんかしてねえじゃねえか、コレ！」

（ピーピー）

「あん？敵機捕捉か。つつても、それらしきモンなんか見……」  
うっ、うわぁ……

「へ？」



大尉、たす・・・

「おい、どうした?」

(バーン)

「アサル?ミラン?オイ、どうした?何があった?返事しろ!」

(ピーピー)

「うっ?」

(ビューン)

「接近してくるのか!クソ、クソ、クソオ!」

(バキューン、バキューン、バキューン)

「どうだ!ウン。」

(シューウウウ)

「どうなってる?俺は確かにビームを。」

(ビューン)

「うわあああ。大佐、大佐、シーベルト大佐あ!」

「ガリバーか、どうした?」

「出たんですよ、ヤツが。」

「ガリバー、落ち着け。どうしたんだ?」

「だから出たっていつてるじゃないですか、ヤツですよ。例の。ヴ

アナル・・・」

(ドーン)

「おい、どうした。ガリバー?ガリバー!」

(ピーピーピーピー)

「ガリバー機他、偵察部隊との連絡が途絶えました。」

「どうしたというのだ、一体。」

(ドバーン)

「うっ。何だ?」

「攻撃を受けた模様です。」

「何?どこから?」

(ドバーン)

(ドバーン)

「ぐう。敵はどこだ！」

「捕捉できません。」

「1機もか！」

「ハイ・・・あ、敵機捕捉！」

「数は！」

「1機ですが、コレは。」

「どうした！」

「ヴァナルガンドです！」

「本当か！」

「ハイ、こちらに接近してきます。」

「MS部隊を出せ！」

「アルバロ、クルス、ムーデラが撃墜されました！」

「何？」

「アロンソ、グスマンも撃墜されました。」

「僚艦が立て続けにか・・・」

「大佐！」

「マズイ・・・」

「敵機、最終防衛ライン突破。来ます！」

「大佐！」

「大佐！」

「うっううっ・・・」

(シウルウウウウウウ、ドバーン)

くザフト軍ゴンドワナ級改修艦『フェルネル』。そのMSデッキにて

「シユライン隊長、カリスの整備終わりました。」

整備士の男が言った。

「おう、サンキュー！」

男は答えた。2mにもなる背丈は、周りの人間に比べると、頭1つ大きかった。彼の名はジャック・シユライン。彼の名を冠した隊の

隊長である。

「しかし隊長、いいですか？コレで。」

「アン？」

「カリスは陸戦用MSですよ。」

「それがどうした？別に宇宙で使っちゃいけない訳じゃないだろ？」

「まあ、そうですね。扱い難いじゃないかと・・・」

「大丈夫だよ、俺を誰だと思ってんの！」

「ですが・・・」

「心配すんなって、そんなにヤワな奴じゃねえさ、オラア。」

そう言うと、ジャックはリフトに乗った。リフトは目の前の灰色のMSの、その腹部まで上がった。腹部がゆっくりと開き、シュラインは中に入る。

「隊長・・・」

整備士の男の口から、ぼやくように毀れた。

「そうらあ、ハッチ開ける！シュライン隊長のお通りだあ！」

灰色のMSの、その目が赤く点灯する。機体前方のハッチが開き、レールが前方に伸びる。

「オツシ。ジャック・シュライン、カリス、行くぜえ！」

機体はレールに沿って前進、レールが途切れた後、機体はやや降下し、そのままゆっくりと前進した。

「アイボン、ヌオー、スードラ！応答しろ！」

スードラです。どうしました？隊長。

「オウ、でアイボンとヌオーはどうした？」

先ほど、敵との戦闘で両名とも・・・

「そうか・・・で、2人を殺つたのは？」

1機のエストックです。盾に山羊がペイントされていました。

「山羊の盾を持つエストックねえ・・・」

シュラインが前方を確認すると、1機のエストックが航空機形態でこちらに接近してくるのが分かった。

「もう御出座しかい。ったくよお！」

機体の左腰部から1本のビームサーベルが引き抜かれる。敵機は目前にまで接近してくると可変し、MS形態となった。エストックの手にもビームサーベルが握られている。

「ウオラアアア！」

先に斬りかかったのはシユラインの方だった。エストックは機体をやや上昇させ、それを避けると、上から振り下ろすように斬りかかった。

「掛かったな！」

シユラインの機体の腕には、グレネードガンが常備されている。グレネードガンのその砲口が火を吹く。弾丸はエストックの腹部に命中する。

(ズウルルル、ドバーン)

「何だよ、性能はあちらさんの方が上だと聞いてたが、何のこたあねえ。やっぱ、パイロットの技量次第なのね、ソコは。」

機体のセンサーは新たな敵を捉えていた。

「確か、アイボンとヌオーを殺した奴は、盾に山羊が描かれてたつてたな……」

前方に現れたエストックの盾には、2本の角を持つ動物の絵がペイントされている。

「アレで山羊なのは甚だ疑問だが……アイツと見て間違いないな。」

シユラインはそのエストックに急速に接近する。エストックの方も、それには気付いていた。

「アレは陸戦用の……」

パイロットのロイは、少し呆れていた。ロイは知っていた、カリスが陸戦用MSである事を。ロイは自分が馬鹿にされているように感じていた。

「舐められたモノだ、大した腕の無い奴にい！」

ロイはゆっくりとビームサーベルを構えた。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
E  
D

PHASE 03 忍び寄る足音（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月7日。事は起こった。サンクトス連邦宇宙軍第五艦隊がグナイゼナウ・スリーに侵攻、コロニー破壊作戦を実行に移す。これに対し、ザフト軍ファンクス、シュライン両隊が出動、交戦状態に陥る・・・）

PHASE 03 忍び寄る足音

先に仕掛けたのはロイの方だった。高速で接近、カリスの右側を通り過ぎ、通り過ぎ様にビームサーベルを突き立てる。ビームサーベルの刃をカリスは僅かな動きで避ける。数秒後、エストックはMSから航空機へと可変する。

「やっぱ、機動力は向こうが上か……」

カリス腕部のグレネードランチャーが放射される。数発連射された内、一発がエストックの右翼に命中した。

「どうだ、効くだろコイツは！」

「クッ。」

エストック機体上部のビーム砲が火を吹く。カリスはそれを楽々と避ける。

「へ！そんなショーもない砲撃なんか当たると思うかよ！」

シュラインが半ば自慢するように言い放った。シュラインには余裕があった。しかし、ビーム砲に気を取られ、バルカンの攻撃に気付かなかった。バルカンの数発がカリスに命中、煙を上げて、爆発する。といつても、左脚部と右腕部が小破したに過ぎなかった。

「チツ、俺とした事が……まあ、イイ。この射程距離なら、こちらにまだ部があるってモンだ！」

グレネードランチャーを再度連射する。しかし、今度は命中しなかった。

「何のお！」

腰部のレールガンを照準、発砲する。一発が右脚部に命中、煙を上げる。しかし、傷は余り大きくない。エストックはとっさに距離を取った。

「逃がすかよ！」

同じ頃、ムツが、トレンチのメインカメラ越しに周囲を見渡してい

た。といつても、見えるのはMSが戦艦の残骸ばかりだった。

「マズイ・・・このままじゃ・・・」

ムツの脳裏を1つの言葉が過ぎった。

“死”

ムツは体の震えが止まらなくなっていた。

(こんな所で・・・こんな所で死ぬ為にボクは・・・)

「うつつ、うわあああ！」

ムツは発狂寸止めの状態だった。四肢を無くした機体は、本来トレンチが持ち合わせていない程の速度を実現、ムツのトレンチはどこに向かっているのかも分からないまま、ただ真っ直ぐに進んでいる。いつても、平行感覚の無い空間での真っ直ぐ、実際にはジグザクに動いている。しかし、ムツは気付かなかった。いや、そこまで気が回らなかつた、という方が正しいか。

「死にたくないよ、こんな所で・・・ボクは・・・ボクは！」

最早、何も当てになるモノが無かつた。顔は青ざめている。気分が悪いなんてモンじゃなかつた。

やがてトレンチのセンサーが、1機のMSを捉えた。

「ウン？」

ムツは思わずホツとした。相手がどんな機体であるかも確認せずに。(良かった。助かつたんだ。ボクは。)

ムツの体の震えは止まっていた。しかし、それはたった数秒間だけだった。

(ドゥーン)

一機のMSがトレンチに急速に接近してくる。そのMSは・・・グファイグナイトッドだった。

(この国の腐敗振りは今や5歳の子供でも知っている。この国の体制が如何に幼稚なモノであったか、それは本当の意味で有能な人間なら十分に理解出来た。コーディネーターは確かにナチュラルよりも多方面で優れる人種だ。しかし、それはあくまでもハンデに過ぎ



ない。ラウ・ル・クルーゼやレイ・ザ・バレルの事例にも見られるように、ナチュラルであつてもコーディネーター並に優秀な人材ははつきりいつて幾らでもいる。無論、逆もあるが。こんな単純な事が、今の政府には理解出来ないのだ。まあそれでも、少しは進歩したといえるのではないだろうか。かつてのコーディネーターは、ナチュラルを野蛮だと口では言っているが、実際にやっている事はそのナチュラルとまったく同じ程に差異が無かった。人々は、“血のバレンタイン”の一件を何かと強調したが、その報復ともいえる“エイプリル・フル・クライシス”によつて地球圏に与えた打撃の方が、遙かに損害は大きかった。そもそも、『やられたらやり返す』、これこそ彼らが言う野蛮な行為ではないのだろうか。もつといえ、パトリック・ザラのような軍国主義者を支持し、アイリーン・カーバのような平和主義者を非難する、この国の民の認識が私には理解出来ない。そこから進歩したといつても、必ずしも良くなつたとはいえない。というか、悪くなつた点の方がよっぽど多い。グライドは出来るだけ争いを避けようとした。しかし、その平和主義的思想は平和な国なら良かっただろうが、今のこの国には適応し難いモノだった。軍費縮小は国内の軍事産業に大きな打撃を与え、軍を半ば無理矢理除隊させられた人間の中に職を得られない人々が急増し、年々失業率は増加傾向にある。『セイバー計画』が民衆に支持されたのは、このような背景があつたからだといつていい。この計画をグライドは弾圧に近い形で処罰していったが、それは反つて国民の政府への不信感を強める結果となつた。『セイバー計画』自体は首謀者ウォルタ・ナーキンスの捕縛で終結したが、国民の不満は収まらない。そんな国民が擁立しているのが、セシル・グレンという男である。彼は“ファーストコーディネーター”として知られるかのジョージ・グレンの長男で、ウォルタの未亡人の再婚相手でもあつた。彼の存在は永らく父ジョージから隠されていたというが、ここ近年、“ジョージ・グレンの会”に代表されるようなナチュラルの団体からも支持を集めており、多くの民衆が期待を寄せて

いる。彼なら変えてくれるのではないかと。しかし、未だ彼の明確な意思は見受けられない。もしだ、こんな時期に他国と戦争ともなれば、この国に勝ち目は・・・まだ大西洋連邦なら別だろうが、相手がサンクトス連邦ともなれば、勝算は限りなく無いに近い・・・)

イスに深々と腰掛ける男。口元に少しばかりの髭、ボサボサと伸びた漆黒の髪、痩せこけた頬。鋭い眼光で、その両目は血のように紅い。男の手にはタンブラーグラスが握られていた。グラスの中身はジン・トニック。

「・・・動くな、これから。」

そう呟くように口になると、男はグラスをゆっくりと口に近付けた。

「プラント首都アププリウス」

「クツ。」

男は歯噛みした。白髪混じりの黒髪で、中年と呼ぶには年老いて見えるが、年寄りと呼ぶには少し若い。そのただでさえシワの多い顔を更に顰め、男は早歩きで、先を急いでいた。男の周りには、彼よりも遥かに年下の、二十代ぐらいの男が2人付き添っていた。その2人の表情も、険しかった。

「まったく、グライドの馬鹿が。何が“軍事面以外の国内産業を育てる為”だ、“戦争が終わった今、軍隊に今までと同じ費用・人員は必要ない”だ。事の重要さが奴にはまったく分かっておらん。だから、こういう事態になって、ロクにコロニーの1つも防衛し切れないのだ！」

男が誰もいない方向に、怒鳴りつけるように口にした。

「それで、どうなさる御つもりでしょうか、ハリスン総隊長！」

男の右側にいた方が尋ねた。

「どうもこうも無いわ！グナイゼナウ・スリーに侵攻した連中はもう手出し出来まい。それより今は、その他コロニー・軍事基地の防衛を徹底させる！」

「しかし、今から追撃すれば間に合うのでは……」

「いや、追撃は絶対にさせるな！敵が退却姿勢をとった以上、プラントの経済圏内を出るのには、グナイゼナウ・スリーからなら30秒とかからん。経済圏内を越えればそこは公海。コロニーへの無法侵入は、敵国の侵略行為とみなし、攻撃しても許されるが、公海ともなれば、話は別。公海での軍の戦闘行為は、先に仕掛けた方に非が出来る。そうなれば、プラントが国際法を破ったとして、非難を浴びる事にもなりかねん。」

「そんな……」

「我が国は仮にも世界連盟加盟国。それも、常任理事国だ。如何なる理由があろうとも、法を破っては、他国に示しがかん。まあ、今回は“テュフォonz”の健闘で敵もかなりの損害を強いられたと聞く。痛み分けぐらいにはなっただろう。」

男はそう口にした。その言葉は回りの2人の為というよりは、自己暗示に近かった。

（……今は焦っても仕方が無い。今後の対応を冷静に考えねば……）

男は1つ、溜め息をついた。

（うつ……うつん？）

ゆっくりと目を覚ます。クリーム色の髪に橙の目。キィ・ムツだ。

（ドコだ、ココは？）

周囲を見渡す。辺りにはただ只管に闇が広がっていた。しかし、宇宙のソレとは大分違う。何故なら、星も機体の損害も無い。ただ、真っ暗なだけだった。

（アレ、ボクはさっきまで戦場にて……それじゃあ、ここは“あの世”か？）

ムツは何故今こんなドコかも分からないトコロにいるのか、納得がいかなかった。

（パーツ）

急に辺りが明るくなる。ムツはソコがどういう場所か、ようやく理解した。

(ここは、捕虜の収容所。そうか、ボクはあの後、捕まったのか・・・)

ムツはどこから記憶が途切れていて、どういう経緯で捕まったのかは分からなかったが、そうとしか思えなかった。

「あっちにいるのは・・・第二艦隊のサイフォン中尉？それに、ネイビー准尉も。」

見覚えのある顔。顔馴染みの延長ぐらいの関係ではあったが、この状況では、心強く感じた。

「おい！サイフォン中尉！ネイビー准尉！」  
「ウン？」

相手も気付いた様で、ムツの方を見た。

「ボクですよ、第五艦隊のキイ・ムツ。ムツ伍長です。」

「ああ、アルケーの定艦式の時にいた！」  
サイフォンの方が振り向く。

「ハイ。」

「覚えているよ、東洋系の人間なんて少ないからな。」

「オマエも捕まったのか？」

ネイビーの方もムツに話しかけた。

「ええ、そうみたいです。」

「みたいって、何だよ、みたいって。」

「よく、覚えてないんですよ。」

「はあ？」

ネイビーは呆れた様子でムツに聞き返した。

TO BE CONTINUED

## PHASE 04 愚者の蛮行（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月7日。事は起こった。サンクトス連邦宇宙軍第五艦隊がグナイゼナウ・スリーに侵攻、コロニー破壊作戦を実行に移す。これに対し、ザフト軍ファンクス、シュライン両隊が出動、交戦状態に陥る。やがて戦闘は、サンクトス連邦側の後退により、終結を迎えようとしていた・・・）

PHASE 04 愚者の蛮行

（サンクトス連邦外蒙古領ダランザドガド軍用基地）

（ピーピーピー、シューウウ）

自動ドアが開く。室内には血によってカーペットのようなモノが出来ており、脱ぎ散らされた服が散乱、その奥にはベッドが1つ、配置されている。ベッドの上に被せられたシーツが盛り上がり、それが丁度谷間のようになっていた。

「ク、貴様という奴は……」

男はベッドの方を睨みつけた。そして、ゆっくりそちらに近付いていく。そして、一気にシーツを剥がした。

「アン？」

シーツの中には、2人の男女の姿があった。そのうち、男の方が寝ぼけた口調でそう漏らした。

「アンバー・カイル！何度いえば分かるのだ？部下に肉体関係を強要するな！」

「フン、指令よお。こういうのって、強要じゃなくて、強姦ってんだぜ！ンマア、何ていおうと勝手だけどよお、俺に説教しても無意味だなんて事、アンタなら分かんじやないノオ？」

さっきまでベッドに横たわって男が、むっくり起き上がり、「指令」と呼んだ男に向かってそう口にした。男は、ロクに下着も身に着けていなかった。

「俺達、強化人間」はセイタイシーピーユー、つまりや“モビスウーツウのパーツ”ってトコよお。“モビスウーツウのパーツ”が頭上から落ちてきて、それに当たった人間が死のうとも、“パーツ”が罪に問われるのかい？それと同じさ、俺達は人間としての戸籍さえありやしねえ。何しても許されるってワケエだ。その分、俺がアンタらの何十人分も働きやいいワケエよ！ブヒヤヒヤヒヤ。」

裸の男が笑いつつ、自慢げに話す。“指令”は特に表情を変える様

子はない。

「ンデエヨオ、指令。今回は何の仕事でいいい？」

「東アジア同盟軍が内蒙古領に侵攻した。目的は国土奪還と見て、間違いあるまい。」

「ブヒヤヒヤヒヤ。ンジャア、俺は連中を逆リンチすりゃあいいの  
かい？」

裸の男が、さつき以上の笑みを浮かべながら、聞き返した。

「そういう事だ。」

「ブヒヤヒヤヒヤ。久しぶりにエンジョーイ出来そうじゃねえかい、  
ヒヤッポー。腕がナルってヤツウダアイ。」

「プラント領軍事基地『サンダース』」

「聞きましたか、隊長？」

机越しに、こちらにも2人の男の姿があった。

「また始まったか、“北伐”が。」

イスに腰掛けた男が、哀れむような口調で話す。ボサボサに伸びた  
漆黒の髪、胸元が多きく開き、だらしない服装、口髭も整えられて  
おらず、中途半端に伸びていた。

「まったく、ドコの国の主も馬鹿ばかりですね。」

もう片方の男も、似たような口調で返す。この男は、髪は赤紫、目  
はグリーン。見るからに黒人と分かる。

「余程焦ってんだろうぜ、劉芳幣<sup>リ・ホンヘン</sup>大統領さんは。なんせ、前政権の  
失態で、国内支持率は右肩下がり。せめて、国土奪還して、少しでも  
も支持率を上げようというハラさ。まあ、無用な出兵で、大した戦  
果も上げられないまま、兵ばかり死なせてるのが現状だけだな  
・・・」

「どついうツモリなんでしょうかね、連中。こんなタイミングで。」

「恐らくは、今なら勝算があると思っただらうな。今回の一件で  
プラントとしても連邦に恨みを持つ結果となった。」

「今なら共闘してくれる、と？」

「まあ、そんなトコロだろう。」

「でも、今の上層部が動きまますかね？」

「仮に、“共闘してくれれば、東アジア同盟の領土を全部くれる”  
っていったって、動きやしないだろうな。」

「でしようね。」

黒人の男は、目の前にあった缶コーヒーに手を伸ばした。そして、  
ゆっくり口に運ぶ。

(ゴクゴクゴク・・・)

「くはあく。で、“テュフォンズ”はどう動く予定ですか？」

「当分は動けまい。とりあえず今は、情報収集が必要だな。ヒカル  
ド、オマエの活躍に期待しているぞ。」

「リヨウカイ、んじゃあ無理して頑張りますあ！」

そついうと、黒人の男は、後ろを向き、ドアの外へと飛び出した。

「まったく、無理しろとはいってないんだがな・・・。」

く内蒙古領サンクトス連邦国境付近く

(ブシュ・・・)

エンジンの音が、空間を大きく振動させた。何十・何百という機械  
の巨人が群れを成し、割とゆっくり進行する。その巨人の正体、そ  
れはMS・ウインダムだった。

総員、攻撃態勢を取れ！

指揮官のその一言で、ウインダム達は、速度を急激に上げた。その  
騒音は、“ウルサイ”等という次元の話ではなかった。

両国の国境線の位置に佇む、コンクリートの壁。そのサイズは、人  
間にとっては巨大な壁であるが、MSの高さで見ると、背の低い  
堀ぐらいにしかない。その“背の低い堀”の内側には、数名の  
サンクトス連邦兵士がいた。

「何の音だ？」

1人の兵士が騒音に気付く。

「まさか、襲撃か？」



「おおい、とりあえず門を開ける！」

“背の低い堀”の、“窓”がゆっくりと開く。外には……  
「アレは。」

「ウインダムだ！急ぎ門を閉め……」

（バキーン）

その命令が実行される事、いや聞える事さえ無かった。1機のウインダムのビームライフルから放たれたビームが、数名の兵士を消し飛ばした。後に残ったのは、どうにか人として認知出来る程の影だけだった。

「どうした？」

「東アジア軍の襲撃だ。」

「援軍だ、援軍を要請しろ！」

「しかし、どこから？」

「ダランザドガド基地だ、ここからなら近い。」

「急げ！」

（ズルルルウ、バーン）

1機のウインダムが、ビームサーベルによって、“堀”を斜めに斬る。一撃では傷が付いた程度だったが、ビームライフルの追撃もあり、“堀”は崩れた。

「フン、意外と手薄なモンだな、ここの守りも。」

「こりゃあ、案外楽にいくかもな。」

「オイ、無駄話をするな！」

「ハイハイ。」

「一体どういうツモリなのだ、ライバンめは。まさか、あの男がこの程度の事を予想できなかったとは考え難い……」

（バキーン）

「ウワァァ！」

1発の銃声、そして1機のウインダムが爆発炎上。

「ク、敵襲か！」

(ズドォーン、ズドォーン……)

銃声は止まらない。男の周りにいたウィンダムは、次々に全身から火を噴出しながら、爆発した。

「ウウ……ウヲォォ！」

男は機体を前進させた。周りはいつの間にか、火の海となっていた。

(ポーン)

ウィンダムの右腕が吹き飛んだ。

「クソォ……ウン、こんなところ、こんなコトでええええ

！」

再度機体を前進させる男、だが……

(ブシュウ)

刃は機体を貫いた。そこにいたのは、蒼いMS。

「ブヒュヒュ、死ンドケエエヨォ！ジャッコヤロウ！」

「まったく、上の連中は何を考えてる？」

男は、ボヤクように口にした。ボサボサと伸びた髪、整える事を知らず、中途半端に伸びた髭、頬は痩せこけ、その影響か、口は尖がっている。服装は胸元が大きく開き、だらしない。そのクセ、目付きは鋭く、その両目は血のように赤い。黄色人種ながら、色は白人並に白く、髪は漆黒と呼ぶ相応しい程に黒い。

「捕虜に尋問？この馬鹿の発想だ。」

「さあ、平和ボケ連中の考えそんな事ですけどね。まあ、見るところ、捕虜連中には將軍クラスは勿論、佐官クラスもいないようですし……どうします？隊長。」

男の隣には、彼よりも頭一つ分程背の低い男が、彼に話しかけた。褐色の肌、赤紫の髪、グリーン目の。

「んで、ヒカルド。うちの担当は？」

“ヒカルド”が答える。

「キイ・ムツって男です。」

「変わった名前だな、東洋系か？」

「オーブ出身らしいですが……しっかし、残念でしたね、隊長。  
“カトリーナ”とかいう美人の捕虜がいたらしいっすけど、シユラ  
イン隊にとられちゃって。ハハ。」

「オーブだと。」

“隊長”は顔色を少し変えた。

「どうしたんです？」

そこを気に留めるとは思いもよらなかったのだろう、“ヒカルド”は  
驚きを隠さない口調で、聞き返した。

「珍しいと思つてな。俺もまあ、オーブ出身みたいなモンだからな。」

「え？初耳ですよ、隊長がオーブ出身だなんて。」

「生まれは東アジアだし、国籍もそっちだが……色々と、思  
い出深いトコロなのさ……」

“隊長”の脳裏を、ある記憶が過ぎった。

「……隊長？」

「ウン。」

「……ワケありつて感じっすね。大丈夫ですか？」

「いや、いいんだ。気にするな。」

「それで、どうします？」

「どうつて……するしかないだろ、尋問。」

（尋問部屋）

（うん、何か緊張するな……）

室内にはテーブルとイスが2つ。その片方には、1人の青年が腰掛  
けていた。ミカンのような橙の眼にクリーム色の髪。肌の白っぽい  
黄色人種で、大きな耳が特徴。

（ピーッ）

「あつ。」

室内にある唯一のドアが開く。そこには、あの“隊長”の姿があつ

た。

「（あの肌の色……もしかして、東洋人？）」

「（始めようか？）」

“隊長”が話しかける。

「アツ、プツ、（ハイ。）」

切り返すが、その発音は悪い。

「Ky-i-mut-su?（まず、キイ・ムツ伍長で間違いない？）」

「（ハイ、確かに自分はキイ・ムツです。） Ky-i-mut-s

「（ハイ、確かに自分はキイ・ムツです。）」

「（オーブ出

身だと聞いているが？）」

「（ハイ、それが何か？）」

「フン、ぎこちないな……」

「へ？」

「やはり、日本語のほうが得意か？」

「分かるんですか、日本語？」

「まあな。オーブには昔居た。もうアレコレ10年ぐらい前になるが……」

「ハア。」

「意外だな、オーブ人がサンクトス連邦軍にいるってのは。」

「まあ、正確には“元”オーブ人ですけど。」

「しかし、矛盾してんじゃないのか？祖国を滅ぼした敵国の軍で、その国の為に働くってのはよ……」

“隊長”は少しばかり、表情を変えた。

TO BE CONTINUED

PHASE 05 子犬と孤狼（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月8日。サンクトス連邦宇宙軍によるプラント領国への侵攻が行われた翌日、東アジア同盟による“第二次北伐”が開始された。世界連盟各国に協力を仰ぐ東アジアだが、各国は救援を拒否、東アジアは世界連盟から孤立する事となる。それでも国土奪還を急ぐ東アジアは、計画を断行したのだった・・・）

「え？」

ムツは思わず聞き返した。その顔を見たか見ないでか、“隊長”はゆっくりと立ち上がり、ムツに背を向けた。“隊長”の後ろ、そこには世界地図があった。

「オーブ首長国連邦。世界区分ではオセアニア州に属し、その総面積は他の連邦国と比較すると遥かに少なく。この世界地図を見てみる、オーブの場所なんて、小さすぎて島1つ確認出来やしない。そんな小さな国には、1000万人もの人間がいた。」

「……」

“隊長”が地図にある日付変更線周辺の、島1つ描かれていない場所を指差してそういった。ムツは突然の事に呆然となる。

「この前の戦争で、この国は主権・領土・国民の全てを奪われた。世間一般でいわれる、オーブ絶望戦争ってやつでな。」

「絶望戦争……」

ムツの表情が自然と暗くなる。“隊長”はそれを少し気にしつつも、表情は余り変えず、話を続けた。

「この戦争、オーブにしてみれば、無謀極まりない内容だった。MSの性能、兵力、物資、どの面でも遥かに劣っていた。戦争は僅か3日でサンクトス連邦の圧勝に終わり、オーブ連邦首長国は、オーブの名を失い、ディカール（野蠻）群島の名を付けられ、サンクトス連邦の植民地とされた。ディカール植民地には、本国とは別に首相の役職が設けられた。初代にして、現首相はアミルカレ・ミロヴィチ。オーブ絶望戦争時に、戦争大臣をしていた男だ。彼が首相になつてから、旧政権の人間は手当たり次第、国家反逆罪の汚名を着せた上で処刑された。特に酷いのは、オーブの国家元首だったカガリ・ユラ・アス八だろつな。部下にその処分を任したらしいが……」

「らしいが、何ですか？」

ムツはゆっくりと聞き返した。

「性的暴行を加えて末に殺し、その死体は裸にされた上で一週間余りも首都市街地に吊るされた。俺も写真でそれは見たが、もう誰だか分からなくなるくらいに顔中傷だらけだったから、本人かどうか、断定は出来ないケドな。」

「それが、何だっというんですか？」

「ムツっていったな。御前、ディカールの人間か、それともオーブの人間か。という話だ？」

“隊長”の表情が変わる。その顔は、笑っているような、それでいて睨んでいるような、何ともいえぬ表情を浮かべている。ムツは、しばらく考えていたが・・・

「分かりませんよ、そんなの。」

「どうしてだ？」

「ボクには、両親と妹がいます。うちの親父、クソ真面目で、馬鹿で、オーブ空軍のエースだった。オペレーション・フューリーで活躍、<sup>せっきやく</sup>“フューリーの雪客”と異名された名パイロットだったと聞いてます。細かい事は小さかったので覚えませんが、ボクにとっては誇らしい父親だった。何度友達に自慢したか・・・でも、あのオロファトでの戦闘で・・・」

「死んだのか？」

“隊長”が杭を指すようにいう。

「いいえ、父は無事でした。ただ戦後に父は職を失い、やがては鬱病になってしまった・・・その後からです、家族がムチャクチャになっただけなのは。母は必死で働いて、最終的に体調を崩して入院してしまった。幼い妹が働ける筈も無く、両親と妹をボクが養わなければならなくなった。でも、ディカールとなったこの国の大方の職業は、25パーセントという今までは考えられない程に高い税率の為に、養うどころか個人が生活するのがやっとでした。医者という選択肢もありましたが、それには学校に通うお金が必要で、で

もそんな金、どこにも無かった。じゃあ、どうするか？答えは1つしかありませんでした。」

「軍隊か？」

「ハイ。軍隊に入れば、幾ら士官学校経由でなくても、収入は毎月15万？（ステイグマ）。贅沢は無理でも、上手くやれば、1月は家族が暮らせて、母の入院費までギリギリ手が回る額です。不器用なボクでも、軍隊にいれば下士官ぐらいにはなれる。もっと上ならもっと貰えるんでしょうが……今のボクには無茶な話。それでも、無二の家族の為です。そりゃあ、ボクだって戦前のオーブという国が好きでした。だから、父を誇りに思っていた。でも、それでも、大事な家族の為ならディカールの、ひいてはサンクトスの人間になったって、ボクは構わない！」

ムツはそう言った。その時の彼の顔、その表情は怯えを隠しきれない。ずくにいたが、それでも力強く、優しい顔をしていた……

「家族の為なら、か？」

“隊長”が呆れたような口調で聞き返す。

「ハイ。」

「フン……随分偽善的なセリフだな。」

「偽善的？」

ムツは驚く。そんな言葉が降りかかってくるとは、予想だにしていなかった。

「御前よ。軍人とはどんな職業か、言ってみろ！」

“隊長”が怒鳴るのに近いような口調で、ムツを問いただす。

「そつ、それは国を守る職じゃないですか……」

ムツが少し弱気になる。

「確かにそれもある。しかし、そんなモンは大義名分の延長に過ぎない。実際は、“政府公認の殺人犯”という方が正しい。」

「そつ、それは違います！うちの親父だって、祖国の為に祖国、ひいてはボクら家族の為に……」



ムツが必死に反論する。しかし、その言葉に先ほどのような強さは感じられない。

「御前には分からだろうが、俺や御前さんの親父のように“ベテラン”と呼ばれるパイロット達にはあるのさ、戦場でこそ得られる快感が。一度それを感じたなら、恐怖心はあれども、戦場を離れられなくなる。口では『戦争は嫌だ』の、『平和が一番だ』のと、言っちゃいるが本当はそうじゃない。平和は退屈なのさ。人間ってのはな、慣れる生き物さ。ずっと人殺してもしてれば、何時からか、人間を殺す事への躊躇は無くなるもの。」

「そんな事……」

ムツの言葉に自信はまるつきり無かった。“隊長”はその後も何事も無かったように話を続ける。

「戦争が無くならない理由……それは、人がいがみ合う事もその一因ではある。しかし、その裏には戦争への快楽を求める人間の姿があるのもまた事実。平和が必ずしも誰もが望む結果ではない。戦争中だからこそ、治安が悪いからこそ、悪事を平然とやれていいと思う奴もいる。」

「そんな、馬鹿な……」

ムツは呆然となる。同時に、ムツは自分より倍は人生を歩んでいるであろう、“隊長”の言葉に“真実”を見ていた。

「理想や美学では人は動かない。やはり、それ相応の利益が無ければ。しかし、軍人はもつと卑怯だ。戦場という命懸けの美酒を味わうと同時に、御国を守る英雄としての名誉も得ようとする。それが軍人の真実だ。」

「軍人の、真実？」

「アア、そうさ。それに戦争中は、町を焼き払おうが、市民を虐殺しようが、物資を盗もうが、何したって、後世に悪事として残るのはその氷山の一角。そして、それを知る人間も少ない。」

「……」

ムツにはもう、言い返す言葉が出ない。

「何千年もの昔から、人間は進化しちやいない。ただ、人間に都合の良い道具と、都合の良い技術が生み出されただけ。終わらないさ、戦争は。誰も終わられないし、終わらせたくない奴さえいる。暴力からは暴力しか生まれえない。だが、優しさから優しさが生まれるとも限らない。言葉でも、行動でも、伝わらない感情がある。御前には分からないさ、俺の苦悩など……愛する女もロクに幸せにしてやれない。大恩ある先輩に恩返しも出来ちやいない。俺を慕って付いてきてくれた部下に何もしてやれない。上層部には睨まれ、憎まれ、恨まれ、疎まれ……」

“隊長”の顔に広がる、苦悶の表情。ムツには自分に向けた彼の背に、哀しさ・空しさを感じていた。

「隊長、こちらでしたか。」

ドアの外には1人の男が立っていた。“隊長”やムツに比べても分かる程に肌の色は白く、茶髪で、目は淡い青に染まっている。

「ジェローム……どうした？」

「先程連絡が入りました、ハリスン総隊長からです。集まり次第会合を開くから、各隊の隊長は急ぎアプリウスに飛べと。」

「チツ、ここからつて時に……」

“隊長”が齒噛みする。

「捕虜の尋問ならボクがしときますよ。隊長は政務に勤しんでください。」

「分かった、俺は行くが ジェローム、捕虜に無茶苦茶するんじゃないぞ。」

「了解してますよ、捕虜如きにブチ切れるボクじゃないですから。」男はニヤリと笑ってみせた。“隊長”は男の肩に手を乗せ、

「フン。それじゃあ頼んだぞ、ジェローム・タクブハイヒ副隊長代理！」

といった。言い終わると、肩から手を離し、部屋を後にした。

「ハア〜イ……シン・アスカ隊長。」

“ジェローム”と呼ばれた男の表情を笑みが支配している。

「・・・シン・アス力。」

ムツはその名を思わず口にした。

「さてと、それじゃあ尋問、ボクの方からしようか・・・キイ・ムツ伍長さん。」

そういうと“ジェローム”は、ムツの向かいにあるイスに腰掛けた。それはさつき、あの男が座っていた場所だった。

〈内蒙古領サンクトス連邦国境付近〉

(ヒュウドオン)

爆発音が鳴り止む様子は無かった。それは戦闘とは到底呼べず、いふなれば、一方的な殺戮だった。強行突破と、大した戦略も無く、力押しで攻め立てる東アジア軍。しかし、それは暖簾に腕押し。東アジア軍のMS部隊はただ、サンクトス連邦軍のMS部隊の的にされるだけだった。

「馬鹿な奴らヨ。媚び諂いでもすれば、ペットにでもしてやったというのニ・・・イエローモンキーというのハ、相当馬鹿な猿らしいナ。」

男は不敵な笑みを浮かべながら、その言葉を口にした。眉無しで、濃紺に染まったその2つの瞳。口元と下顎から伸びた長い髭。天辺禿げだが、両耳の少し上から金と茶が飽和した色の髪が、肩下まで伸びていた。

「全軍に連絡シロ。これより我が隊ハ、中国大陸侵攻作戦を実行に移ス。いいカ、そろそろ上モ、お猿のショーに飽き飽きしているトコロ。この際ダ、東アジア軍の戦力を徹底的に叩き潰せ！イイナ。」  
命令口調で男がそういうと、サンクトス連邦軍のMS部隊及び諸艦がそれに従い、東アジア侵攻がゆっくりとその幕を開けた・・・

〈プラント首都・アププリウス〉

「集まったか、諸君。」

ザフト軍最高司令官トーマス・ハリスン。彼の前には円卓の長いテーブルがあり、そのテーブルの周囲には幾つかの椅子がある。その椅子の1つ1つに、彼と同じ、白の軍服を身に纏った男達が座っていた。

「ジョー、誰が来ておらん？」

トーマスが部屋の入り口に立つ男に尋ねた。

「ジャック・シュライン隊長にアトラス・マーキュリー主席補佐官、後はシン・アスカ隊長がまだ来ておりません！」

“ジョー”がそう答えた。

「フン、まあこれだけいけば十分だな。これより、会合を行う。議題は今回のサンクトス連邦軍の侵攻に対する対応についてだが……」

「」

(ガチャ)

「ウン？」

部屋には二箇所の入り口がある。トーマスは思わず、“ジョー”が立っているのとは別の方の、ドアに目を向けた。今では珍しくなったドアノブ式のドアがゆっくりと開いていく。それは一見すると、独りでに動いているようにも見える。ドアが完全に開くと、そこには1人の青年が立っていた。トーマスより年下なのは確かだが、“ジョー”よりは少し、大人に見える。

「オマエは……アロイス・ギョーム。」

トーマスは呆然した。

T O B E C O N T I N U E D

PHASE 06 安陽を落とせ！（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月8日。東アジア同盟は世界連盟からの非難を他所に、“第二次北伐”を開始した。その初戦、東アジア軍はサンクトス連邦との国境付近での戦鬪に大敗に終わる。この戦鬪の後、勝算を見出したサンクトス連邦軍は、これを期に、中国大陸への侵略作戦を決行する。この戦争によって、両国が利益以上の損害を、互いに受ける結果になるとも知らずに・・・）

安陽市。東アジアの首都にして、同国の最大都市。サンクトス連邦との戦争に備えて、国境付近にある都市の要塞化が数年前から押し進められていたが、その影響を最も大きく受けたのが、ここ安陽である。過去にサンクトス連邦と旧東アジア共和国との戦争の際、圧倒的優位にあった連邦側を2度に渡って退けた。一部では、安陽戦での勝利があったからこそ、東アジアは滅亡しないで済んだとまで噂され、東アジア同盟形成の際、「国内で最も安全な都市」との理由から、首都にも選ばれた。サンクトス連邦が今日まで東アジアへの侵略行為を躊躇ってきたのは、この都市の存在が大きい……  
「アークエンジェル級三番艦『アルケー』、そのブリッジ」

「まあ、こんなところでしょうか……」

青年はその一言で締めくくった。ブリッジには、幾つかの人影がある。今喋っていた青年を含め、皆ある一方方向を向いて立っている。1人の男を除いて。椅子に腰掛けた老け顔の男、それはルート・ハルバートン、その人に他ならなかった。

「フン。ご苦労ダ、ロイ・レギン。それデ、上は今後の対応を如何にせいト？」

「ダニエル・ライバン大將は、『安陽を攻めるには、準備不足も甚だしい。援軍を送るから、それまで待つておれ。』との御達しです。」

「ロイ・レギン」と呼ばれたさっきの青年とは別の、彼よりも年下と思われる青年が答えた。

「フフフフ、フアアア！」

突如として、男は笑い出した。

「あの百姓上がりの男ガ、そんな事ヲ……笑止！」

「え？」

青年は思わず耳を疑った。ライバンといえば、サンクトス連邦では

国民的英雄。それを“百姓上がり”と馬鹿にするというのは、彼らからすれば、衝撃的なセリフだった。

「物事には“勢い”というモノがある。“勢い”に乗ってしまえば、こちらのモノ。あんな猿どもも、遅れを取る道理はナイ！」

男の口調は、自信に満ちていた。彼がライバンを軽蔑するのには、ワケがある。父親のデュエインに代表されるように、彼の家系は大西洋連邦の、軍人との関係者が関の山で、彼自身も過剰暴力で名誉除隊になるまで、大西洋連邦の軍人だった。今はサントス連邦軍にいるとはいえ、「職業軍人家系に生まれた男」としてのプライドが彼にはあつた。それに対してダニエル・ライバンはいえば、モスクワ周辺に住む、有力な農民の出。どこかで、「百姓風情が」と、蔑む感情を彼は持っていた。そのライバンが、自分の判断と違う命令を出し、それを承認するというのは、彼にはシャクでしかなかった。

「ホントに、イイのですか・・・命令に背く事になりますか・・・」

青年が聞き返す。

「そんなコト、俺の知った事力！」

ハルバートンは強気だった。

「イイカ、貴様ラ。俺の命令に背いて三口、命はないと思エ！貴様らの命ハ、俺の手の中にアル。貴様らの1人や2人、俺がカツとなつて殺そうガ、後から戦死した事にすればイイだけのハナシ。過去に俺ハ、気に入らんヤツはそうやって消してキタ。それは貴様らも知つてオロウ。俺の命令通り動ケ、叛けば殺すゾ。イイカ、貴様の代わりは幾らでもいるンダ。分かったカ！」

屈強な男達の顔が青褪める。まだ、戦闘中に撃墜されて戦死したというのならまだマシだが、上司の制裁を受けて殺されたとあつては、死んでも死に切れない。彼らは皆、口には出さないが、そう思っていた。

「ルート・ハルバートン。どこまでも理不尽な男・・・」

ロイ・レギンは、とても小さな声で、しかも、口を閉じたまま、そう言った。勿論、誰もそれに気付く者はいない。

〔東アジア同盟首都・安陽市〕

「李成品或？送？（李首相の護送は終わったのか？）」

「？。而？在我？已？抵？成都的。（ハイ。今頃は成都の方に着いているところかと。）」

「那就好。（それならいい。）」

「但元？。多、并？？？合体的侵？、但是、？？？？？系正？在、一个夸？（しかし、元帥。幾ら、連邦の侵略が進んでいるとはいえ、この対応は大袈裟なのでは・・・）」

「？？个？瓜！有可能危害？的像？理沿着身体。？在？？只被？弃、和安？。（馬鹿が！首相の身に危険が及ぶような事があつてはならん。今度ばかりは・・・落ちるかもしれん、安陽が。）」

「几乎没有。（まさか。）」

「我？没有。？手、但球？都表示、？个党的拿破？？争？！（無いとはいえん。相手は、現代のナポレオン戦争の当事者といわれている連中だぞ！）」

〔安陽市周辺〕

「見えてきたナ。アレが『10万の兵の進撃を止めた』とかイウ、城壁力？」

ルートが尋ねる。

「ハイ。実体のある防壁の中でも抜きん出て耐久性が強く、陽電子砲でも破壊は非常に困難。またその城壁の下部には、トーチカ式の形状が取られており、武装したMS部隊が配置されており、正攻法で攻撃を仕掛けようものなら、的にされるだけかと・・・」

答えたのはルートの隣に立つ青年、ロイ・レギンである。

「フウン・・・それデ、どうする気力？」

ルートが再度尋ねる。



「まず……」

ロイがそう言うと、突然無口になり、近くにあった窓ガラスに目をやる。そして、

「決死隊を、集めます。」

と言った。彼の目線の先には、数人で固まって話をする同僚達の姿が確認できた。

「それデ？」

ルートはロイにその続きを、話させた。

「……適当な変装をさせた上で安陽市内に潜入させ、市街地に住む“アースバウンド”と合流させ、行動を起こさせるのです……」

「ロイは丁寧な口調で、そう答えた。そして、数秒ほど間を開けてから、再び喋り始めた。」

「東アジア軍のMSを強奪し、町の攻撃を行わせる。そこまでさせたら、何らかの合図を送らせる。その合図を確認した後、こちらの艦隊が出動し、攻撃を開始します。」

ロイが喋り終わると、ルートの表情を確認する。ルートは少し考えてから、

「中々の策ではあるガ……どうやって市内に潜入させるのダ？東アジアの連中とテ、国境の警備は嚴重なハズ。もうあちらにハ、こちらの侵攻が始まった事は伝わっておるだろうシ……」

「……確かに、サンクトス連邦との国境の警備は、嚴重でしょう。ですが、各市との境目なら、警備は軽い……」

ロイは得意げにそういった。

「どういう事ダ？何が良かったイ？」

ルートは意味を理解し切れていない。

「……つまり、国境を通らなければよいのです。外蒙古から凡ムスリムを経由し、東アジア内部に侵入させる。そこから、安陽に行くのであれば、手間が掛かるのは避けられませんが、これなら、安陽まで向かわせる事もまた、可能かと……」

「・・・ナルホド。内外蒙古から凡ムスリム会議への航空便は旧暦の時代から続いてイル。内外蒙古が如何にサントス連邦の植民地となつてからモ、航空便だけは途絶えてイナイ・・・意外な盲点を見つけたモノダ。」

ルートは顔に自然と笑みが零れた。その笑いを少し抑えながら、再度ロイへと尋ねた。

「それデ・・・決行は何時力？」

「準備を考えても、1週間後ぐらいが宜しいと思われませす。」

「ヨシ。それでは急ぎ集めさせるとするカ、その決死隊とやらヲ・・・」

〔安陽市竜安区MS保管庫〕

「！（あれか？）」

「（みたいだな。）」

「？（静かにしろ。見つかったらどうする？）」

「！（急げ！）」

地元では聞きなれない言葉が飛び交っていた。東アジア同盟という組織内で、中国語以外に、韓国語や日本語、ベトナム語、タイ語に英語と、多様な言語が使用されているが、ロシア語というのは、ほとんど使われていない。それを使う者といえば・・・

（ガサ、ガサガサ・・・ガサツ）

物音がチラホラと聞こえ出す。その数分後・・・

（ドドドツ・・・ドゥーン、グイーン）

先程とは比べ物にもならない程に大きな音が聞えたかと思うと、保管庫の中にあつた1機のウイングダムが、保管庫の天井を突き破り、直立する。

（ドタン、ドタン、ドタ・・・）

それに続いて、また1機、また1機と、保管庫の天井を穴だらけにしながら、ウイングダムが立っていく。その大きな音に気付いた民衆

は、脆くもパニックを起こす。

「……Wyndham

（……如何に旧式のウィンダムといえど、彼の人々にとっては、恐ろしい巨人以外の何者でも無いか。）

とあるウィンダムのパイロットが、そう呟いた。潰れたような、低く長い鼻。鉛筆で書いた線を思わせるその両目。唇はタラコのように太い。頬は少し凹みがあり、顔中に吹出物が出来ている。

！（ジョゼブ・ヴォラーク少佐。

ご指示を！）」

（急ぎ、他のMS保管庫を攻撃し

た部隊と合流を測りましょう。）

「（ハイ！）」

（安陽市北関区）

「王?!王?!（王元帥!王元帥!）」

「什?事?(どうした?)」

「此前、??了??安全区、被剥?的小机器MS10。（先程、竜安区の保管庫が襲撃を受け、MS10機余りが強奪されました。）

「什??(何?)」

「?似的?害都市圏声明尹?・・・(殷都区・文峰区でも同様の被害が・・・)」

「?是什??他?什?不能?防?(何をしている!どうして防ぎきれなかったのだ!)」

「?然、它有像叛徒・・・(それが・・・どうやら、裏切り者が出

た様で……」

「？叛徒！走出城市、我？的？事、地球行”？不是……（裏切り者だと！そんな馬鹿な、我らが軍に“アースバウンド”がいたのは……）」

「元？、以及在？里的？？坏……（元帥、こちらの保管庫でも同様の被害が……）」

「什？？（何？）」

（シュルルルーン、ズズズウ……）

「元？！（元帥！）」

「是？。（ウン。）」

男の目線の先には、1機のウィンダムがいた。ウィンダムはその拳をゆっくりと振り上げた。そして……

（ドウバーン）

拳は振り下ろされた。その後には、残骸と化した建物と、血塗れの肉片と化した人間の姿があった。

東アジア同盟軍元帥・王陶平<sup>ワシヤイピン</sup> 12月15日、MS部隊の攻撃を

受け戦死。享年51歳。

TO BE CONTINUED

PHASE 07 東アジアの英雄（前書き）

（C・E・81年、サンクトス連邦首都ルーツイクの日付で12月15日。東アジア同盟による“第二次北伐”の報復として、サンクトス連邦軍が国境を超え、中国大陸侵攻作戦を開始してから早1週間。サンクトス連邦側の奇策により、首都防衛の最高指揮官を任せられていた王陶平氏が戦死、安陽要塞陥落も時間の問題となっていた。しかし、事はそう単純な結末を迎えてはくれなかった・・・）

（1週間前）

廊下で2人の男がすれ違う。220？という恵まれた体格の男。その顔はというと、まるでチクワか何かのように潰れて太い長い鼻に、鉛筆で書いた1本線に酷似した両目。唇も、タラコの如く太く、顔中吹出物だらけときている。

「ジョゼブ・ヴォラーク少佐。」

男が声をかけた。177？の背丈は2m前後がほとんどのサンクトス連邦軍の中では、大人の中に紛れた子供のように、当然小柄。白金一色に染まる髪は、首の先まで伸びており、寝癖などが無い。サングラスをかけ、その額には何か刺さったような跡が来ている。「ヴォラーク」は彼に背を向け、無表情で、彼の言葉に返答する。

「此度の作戦立案、見事です。ロイ・レギン。」

「ハッ。有難うございます。」

「ロイ」は口ではそう言いつつも、表情は何とも微妙なモノだった。

「・・・流石というべきでしたかね？やはり伊達に、フリーダムのパイロット“キラ・ヤマト”と共に最強と名高かった伝説のパイロット、“アスラン・ザラ”を討つただけの事はありますな。」

「ヴォラーク」、今度は少し笑みを浮かべながら、「ロイ」に言葉を返した。

「私1人の実力なら、勝ち目はありませんでした。アレはヴォラーク少佐のご活躍があつての事でしたので・・・」

「ロイ」の表情は少し険しい。

「嫌々、そういうお世辞は要りませんよ。ジャステイスの撃墜は紛れも無くもキミの功績。確かにあの時のエストック部隊の指揮を執っていたのは、今のキミと同じ上級大尉だった私ですがね。あの時のキミは確か、中尉でしたかね？」

「いいえ、少尉でした。」

“ロイ”は、“ヴォラーク”が喋り終わった次の瞬間には、その一言を返していた。“ヴォラーク”は数秒程、言葉に詰まったが、  
「・・・いずれにしても、お互いに出世したものじゃないですか。  
私はアレの功績で二階級特進、今の地位にある。キミもキミである  
後、多くの戦功を上げ、今は上級大尉になったワケだ。」  
と返した。

「何か、ご不満かな？」

“ヴォラーク”は続けて、少し不機嫌そうに聞き返した。

「いいえ。自分ではつきり、特殊部隊等ではなく、一般兵と民衆に  
大役を任せるという点を非業されるものかと思っております・・・」

“ヴォラーク”はそう聞くと、唐突に笑い出した。暫く彼は笑い続  
けると、困惑気味の“ロイ”に意外な言葉を返した。

「何を言われるかと思えば、そんな事でしたか。問題ないでしょう。  
民衆とはいっても、相手は“アースバウンド”。地の利をよく知る  
彼らなら、腕の悪い特殊部隊連中よりはよっぽど使えるでしょう。  
それに・・・」

“ヴォラーク”は先程とは違う、笑みを浮かべた。

「こんな事で落とせると思っていない筈です。違いますかな？  
フランケンシュタイン”君。」

「・・・」

（一週間後）

「想要?! 想要?!」

建物全体に響く程に、声を張り上げて叫ぶ男。ここは安陽の隣市・  
鄭州市の、東アジア同盟軍の基地の、拠点たる宿舎である。この男、  
ボロで身を纏い、宿舎の入り口で、その行動を行っている。

「有什? 用?」

男の声を聞き、別の男が彼の方に近寄ってくる。彼と体格は同じく  
らい、だが身形は整えられている。

「??? 面包 / ?? 面包 . . . .」

ボロを着た男は息が上がった状態で、同じ言葉を繰り返す。

「??? 面包 / 怎?了?」

もう片方が聞き返すと、ボロを着たその男、必死な顔で相手の肩を掴み、

「? 感第一。所以。周一食埃塔没有!」

そう言った。

「??? 面包是坏?? 得出城 / 我会 . . . .」

そのもう片方の男は、顔が一瞬で青褪めてしまった。

「??? 面包就是? 什? 有一个很大的最? / 但我会做 . . . .」

「プラント領月面基地『サンダース』」

「. . . . やはりか。」

男は呟くようにいった。イスに深く腰掛けた男。ボサボサと伸びた漆黒と、髪・髭。だらしない着こなしの軍服。鋭く血のように赤い眼。色白の黄色人種。“シン・アスカ”、その人である。

「ええ。この時ばかりと、サンクトス連邦軍が中国大陸へと侵攻を開始した模様。さつき入った情報によると、首都・安陽市街地にて暴動が起こり、それに伴ってウインダム数機が強奪され、大損害を出しているとの事です . . . .」

聞かれてもいないのに、男は答えた。“シン”の目の前に立つ。褐色の肌、赤紫の髪、グリーン目の。“ヒカルド・ガーティ”である。  
「こりゃあ、安陽陥落も確定的でしょうね。」

「いや、まだ分かんらん。」

“シン”は再度、呟くような口調で、“ヒカルド”の言葉に返答した。

「そりゃあ、また何で?」

“ヒカルド”が聞き返す。

「聞けば、今年から首都防衛を任されていた王陶平は前線にいた経ワンターピン験は少ない男らしい。前任者がそんな奴に、国境警備の最前線とも



いえる首都防衛をただで任すと思うか？」

「それはそうですが・・・」

「それにな・・・」

「それに？」

“シン”が続きを言おうとした時、

(ブー、ブー、ブー)

彼の手前にある机から、何かの物音が聞えた。しかし、机の上には何も無い。

「ウン？」

「ケータイじゃないですか？」

“シン”は机の、上から2段目の棚を引っ張り出す。中には、振動する彼の、黒淵のケータイがあった。

「着信ですか？」

「いや、メールだ。」

画面に映った一件のメール。送信者は、“ルナ”。本文にはたった一文、

(今、会える?)

の文字。

「フン・・・」

↳ 鄭州市・東アジア同盟軍本部↳

「? 的心?!? 的心?!」

そう喚きたてながら、男は部屋に飛び込むように入ってきた。

「???。 什??」

それに返答したのは、室内にいた1人の老人だった。髪は薄く、真っ白。口元には少しばかりの髭。丸いレンズの、小さなメガネをかけた、その老人。

「安? 安? 是・・・」

男は半ばパニックを起こしながら、“安?”という言葉を連呼する。  
「? 事?」

老人は、ゆつくりとした口調で、男に聞き返す。

「……？攻？和破壊状？」

男は、少し落ち着いたらしく、口調は少し丁寧になった。しかし、体の震えが止まらない様子。

「或？邦？」

老人はまるで動揺した様子を見せず、ただ冷静にそう切り替えた。

「？。」

「如果？？？做、？？部？？去、送白色。？事？官？着孩子。」

老人はフツと立ち上がり、ヨボヨボと歩き、男の下に近寄る。

「？不起、不告？？好？？」

そう言うと、自分よりも少しばかり背の高い、男の肩をポンポンと叩いた。

「？。」

それを聞き、男は全身の震えを必死に押さえ、部屋を飛び出て行った。

（この老兵に、また無理をさせようというのか。全く、世話の掛かる小僧よな……）

老人はそんな事を思っていた。

老人は名を呉子遠<sup>エントーチン</sup>。前年まで、安陽市の防衛最高監督の地位にあった男である……

（安陽市周辺）

（バーン、バーン、バーン……）

銃声が鳴り響く。

「合図は何発だったか？」

ルートが尋ねる。彼の右側には、ロイの姿がいた。そのロイが、

「5発です。5発撃った後、丁度30秒後にもう1発撃つ。今ので3発でしたから……」

「後、3発力……」

ロイはコックリと頷く。

(バーン、バーン)

「今、4発目と5発目でしたから、後1発です。後1発銃声が聞えたら、進軍開始です。」

「ウム。」

ルートは、画面上の隅に写った時間を、しきりに気にしている。

「・・・24.25.26.27.28.29・・・」

ルートが、“30”と言いかけたその時・・・

(バキューン)

1発の銃声がルートらの耳に飛び込んできた。

「フン、1秒の誤差もない力。見事・・・ヨシ、それでは侵攻開始と行く力。先鋒は・・・シエーマスの小隊だ。」

ルートがそう言うのと、その後ろにいた、銀髪の男が右手で敬礼し、

「ハッ、有難き幸せ！」

といった。更に彼はロイの方に体を向け、

「悪いな、レギン。」

とも口にした。

「・・・いいえ、此度の自分の仕事は作戦立案。シエーマス少佐に一番槍はお任せします。」

ロイは俯きながら、その言葉を返した。

「鄭州市東アジア同盟軍本部」

「网？、？什？他不能？助。」

男は漏らすように口にした。彼の名は林長延。<sup>リンチャョーレン</sup>東アジア同盟軍で副

将の地位にある男。160？という低い背丈と、よく伸びた髭が特徴的な男である。気は長い事で知られているのだが、彼は今、とても苛立っていた。

「？是最在我？？大的支持城堡・・・」

安陽の現状は彼の耳に入っていた。

「黄貂？、通？？？我？一旦我？？做？！」

男が立ち上がり、どこかに向かおうとすると、周囲にいた屈強な兵

士達が慌てて彼によって集り、

「？不要在命令森林第二！」

と行って、必死に彼を諫めようとする。そんな兵士の1人が、彼の後ろに回り、彼を羽交い締めにした。

「我下?!」

林は必死に抵抗するが、小兵故か、抵抗は無意味に近い。

「是危?的。」

彼を羽交い締めにした兵士が、彼の耳元でそう呟く。

「我可以著名！」

林なおも抵抗する。が、ビクともしない。

「廉第二个命令！」

周囲が彼の名をいう。

「曲奇。」

林は歯噛みすると、抵抗する事をやめた。兵士たちは彼を元いたイスの上に座らせた。

「?西, 或者?是一个沮?的?子。林二把手。」

林は後ろから声を掛けられた事に驚き、慌てて振り返る。そこには、

“アノ老人”の姿が・・・

「哦, ?。?大?!」

林はイスから飛び上がるように立つと、その老人に頭を下げる。それを見て、周囲の兵士達もそれに合わせて、頭を下げた。

「如果?生气, ?个决定是不冷静・・・」

老人は顔に笑みを浮かべながら、林に向かってそういった。

「但・・・」

「它是好的, 我有一个想法・・・」

老人はニヤリと笑い、林を見つめた。

TO BE CONTINUED

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9935z/>

---

機動戦士ガンダムSEED DESTINY GLORY

2012年1月4日10時50分発行